

ひととせ、入道殿の大井川に逍遙せさせ給ひ

しに、作文の舟、管弦の舟、和歌の舟と

分かつせ給ひて、その道にたへたる人々

を乗せさせ給ひしに、この大納言殿の

参り給へるを、入道殿、「かの大納言

いづれの舟にか乗らるべき。」と

ば、「和歌の舟に乗り侍らむ。」と

のたまひて、よみ給へるぞかし、

小倉山 嵐の風の寒ければ

紅葉の錦着ぬ人ぞなき

申し受け給へるかひありてあそばしたりな

御自らものたまふなるは、「作文のにぞ

乗るべかりける。さて、かばかりの詩を作り

たらましかば、名の上がらむこともまさり

なまし。くちをしっかりとけるわざかな。さても、

殿の、『いづれにかと思ふ。』と

しに、なむ、我ながら心おこりせられし。」と

のたまふなる。一事のすぐるるだにあるに、

かくいづれの道も抜け出で給ひけむは、

いにしへも侍らぬことなり。

ある年、入道殿（藤原道長）が大井川で舟遊びをし

なされた時に、漢詩の舟、管弦（音楽）の舟、和歌

のお分けなされて、それぞれの道に優れた人々を

お乗せになったが、この大納言殿（公任卿）が

参りなされていたのを（ご覧になって）、入道殿が、

「あの大納言殿は

どの舟にお乗りになるのだろう。」とおっしゃると、

（大納言殿は）「和歌の舟に乗りましょう。」と

おっしゃって、歌を詠みなされたのだよ、

小倉山や嵐山から吹き下ろす山風が寒いので

紅葉（の落ち葉が）人々に散りかかり、錦の衣を着

ていない人はいないことだよ。（誰もが錦の衣を着

ているように見えることだよ。）

（大納言殿が自分で）申し出なされたかいがあつて、

（見事に）お詠みになったことよ。

ご自身がおっしゃったということには、「漢詩の舟

に乗れば良かったなあ。そして、これほどの（優れ

た）漢詩を作った

ならば、名声もきつと上がっていた上がったいた

だろうに。残念なことだよ。それにしても、

入道殿が『どの舟に（乗ろうと）思つのか。』と

おっしゃったのは、